

公的統計マイクロデータ研究コンソーシアム
NEWSLETTER

INDEX

Vol.08

OCT.2025

特集：長崎大学
情報データ科学部インタビュー … 02
調査票情報利用のための
オンサイト施設紹介 …… 08

イベントレポート …… 09
活動報告 …… 09
今後の活動予定 …… 10
問合せ先 …… 11

座談会

データ科学と情報科学の 両方を身に付けた 新時代のデータ人財を育成する

出席者

長崎大学情報データ科学部

教授 植木 優夫さん、准教授 神山 剛さん、准教授 瀬戸崎 典夫さん、准教授 松本 拡高さん

聞き手 情報・システム研究機構戦略企画本部 主任 URA／特任准教授、公的統計マイクロデータ研究コンソーシアム運営委員 岡本 基さん

幕末のオランダ軍医による医学講座を創基とする長崎大学に2020年、情報データ科学部が新設された。日本初の「理系のデータ科学部」として注目を集める一方、文系出身者にも広く門戸を開いている。同学部の教育方針や統計・データサイエンス（以下、DS）教育の取り組みや特徴について、4人の教員の方々に伺った。



聞き手 岡本 基 さん



植木 優夫 さん



神山 剛 さん

データ科学と情報科学を 融合した新しいコンセプト

——皆さんは情報データ科学部創設と同時に着任されたとのこと。まずは、それまでのご経歴や専門、現在の担当科目をお教えてください。

植木 「私は統計学が専門で、情報・システム研究機構の特任研究員として統計数理研究所にもお世話になり

ました。その後、医学系の大学・研究所で生物統計や遺伝子・ゲノムのデータ分析などを手掛けました。

着任当初は1年生向けの『確率・統計』と3年生向けの『医療・生命情報学Ⅱ』を担当しました。今年から確率・統計は松本先生に引き継ぎ、1年生向けの『数理・データサイエンス』を受け持っています。学生に好きなデータで分析をさせているので、公的統計を使う人もいます。」

神山 「私はNTTドコモの研究開発部門に15年ほどいまして、スマートフォンのソフトウェア開発などを担当しました。また端末を通して得られるSNSのデータや人流データなどをマクロに分析して、新しいサービスをつくる仕事も手掛けました。いわば、DSと情報科学（IS）を組み合わせ、ものづくりに生かす取り組みですね。現職でもそうした研究を続けています。担当科目は、ビッグ



瀬戸崎 典夫 さん

データ分析に関する講義と演習、データベースなどです。」

瀬戸崎 「私は2014年に長崎大学の教育学部に着任しまして、情報データ科学部へ異動しました。専門は教育工学で、バーチャルリアリティ技術を使った教材の開発や、それを実践的に使って評価をする研究をしています。また、その一環として、ICTの活用など情報教育系のことも手掛けています。科目は情報メディア論と、学部の共通科目である『実社会課題解決プロジェクト(PBL)』を担当しています。」

松本 「私は東京大学で学位を取った後、理化学研究所の研究員を経て着任しました。専門はバイオインフォマティクスで、ゲノム配列のデータ解析などを手掛けています。講義は、植木先生の後任として確率・統計などを担当しています。」

——皆さんのご経歴を伺うだけでも、いわゆる理系教育だけではなく教育から社会政策まで幅広い分野を扱う貴学部の特徴が垣間見えますね。改めて、学部の教育方針についてご紹介ください。



松本 拓高 さん

神山 「当学部は、データサイエンスの基礎だけでなく、応用にも力を入れています。今はあらゆる業界・業種で、データに基づく意思決定や、製品・サービスのAI化などが進んでいます。そうした実社会において、真に具体的な価値をもたらす人材を生み出すのが、当学部の目標です。」

そのためにはDSはもちろんのこと、実際にアイデアを形にするという意味ではISも必要です。私たちは『情報データ科学』を、その両方からなる学問領域と定義しています(図1)。このコンセプトを打ち出したのは当学が日本で最初でしたが、最近と同じ名称の学部を新設する大学も増えており、その重要性の認識が広まってきているように思います。

2年次からはどちらに軸足を置くかによって『DSコース』と『ISコース』に分かれ、DSの場合は医

療・生命・社会・観光といった応用専門科目を履修していくことになります。ただ、学生が将来なりたい職業に対して必要なスキルセットには、さまざまな組み合わせがあります。そこで、DSコースに所属していてもISコースのすべての科目を受講できるし、逆もまた然りという仕組みになっています。

また、従来のような講義と演習に加えて、PBLをDSとISの共通科目として設定しています。企業や自治体と連携して、実際の社会課題を解いていくといった実践的な教育プログラムです。」

植木 「当学部の教育プログラムは、文部科学省の『数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度』の応用基礎レベルプラスに認定されています。このプログラムに沿って科目を履修すれば、各自の選んだ専門分野においてデータサイエンスを応用できる基礎力が習得できるのです。そこに魅力を感じる学生さんもいます。」



図1：長崎大学情報データ科学部の掲げるコンセプト
<https://www.idsci.nagasaki-u.ac.jp/about>

各自の好きなデータや “生きたデータ”で興味を 持たせる

——実際の講義では、どのような
データをお使いですか？

植木 「講義によって異なりますが、『数理・データサイエンス』は対象が1年生ですので、まずは各自が好きなデータを探してきて、それを分析するスタイルを採っています。自分で探すのは難しいという学生には、e-Stat（政府の統計データを集めたポータルサイト）やSSDSE（教育用標準データセット）、長崎県のオープン

データ、それから私が詳しい医療系、例えばがん統計や介護のオープンデータなどを紹介しています。一方、興味のある人が選択する『医療・生命情報学』では、医療系データを使っています。」

神山 「『ビッグデータ分析』と『データベース』では、マクロな人流データ、例えばドコモが提供している『モバイル空間統計』を使っています。このデータでは、全国500m×500mのエリアごとに、今そこにいる人数とそれぞれの性別・年代・居住地などの属性が分かります。授業ではこれを題材としてデータベースを操作する、お題を与えて仮説検証してみると

いった内容を扱っています。」

瀬戸崎 「『実社会課題解決プロジェクト』にはA～Dの4つの科目があります（図2）。Aは1年生の必修科目、Bは2年生の必修科目、CとDは3・4年生の選択科目です。いずれもPBL（Project Based Learning: 課題解決型学習）の形式を採っており、5名程度のグループに分かれて企業や自治体の方とディスカッションしながら課題を見つけ、さまざまなデータを使いながら解決策を考えるものです。

データの入手先は、自分たちでアンケートを取ってデータを作る場合と、長崎市や島原市の観光地域づく

カリキュラムマップ 2025年度入学者

凡例： ■ 両コース共通：必修 ■ DSコース必修・IS選択 ■ ISコース必修：DS選択 ■ 両コース共通：選択

	1年次				2年次				3年次				4年次			
	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q
サイエンス [DS]	統計学系科目				応用系専門科目 (医療・生命・社会・観光) 社会・観光情報学A 社会・観光情報学B 社会・観光情報学C				医療・生命情報学A 医療・生命情報学B 数理統計学 時系列分析				※DSを選択した学生は応用系専門科目の少なくとも1系統の科目を必修とする			
共通科目	▼コミュニケーション				情報メディア論 実社会課題解決プロジェクトA (PBL) 科学者倫理 実社会課題解決プロジェクトB (PBL)				ビッグデータ分析 ビッグデータ分析演習 デザイン情報学I デザイン情報学II 技術英語II プロジェクト研究(インターンシップ) 実社会課題解決プロジェクトC (PBL) 経営管理 産業経済学				パターン認識と機械学習 パターン認識と機械学習演習 技術英語III 実社会課題解決プロジェクトD (PBL)			
	▼基礎数学				線形代数I 線形代数II 大学数学入門 微分積分学I 微分積分学II 確率・統計 数理・データサイエンス				微分積分学III コンバイラ							
	▼情報学基礎(コンピュータ科学)				プログラミング演習I プログラミング演習II プログラミング演習III 情報ネットワークI 情報ネットワークII グラフ理論と最適化 情報理論				オートマトンと言語理論 コンバイラ 認知システム論A 画像処理 情報セキュリティI オペレーティングシステムI オペレーティングシステムII				認知システム論B 音響音声工学 HCI マシンビジョン			
	情報セキュリティ系科目				情報セキュリティI 情報セキュリティII 情報セキュリティIII ネットワークセキュリティ				情報セキュリティI 情報セキュリティII 情報セキュリティIII ネットワークセキュリティ				卒業研究			
インフォメーション [IS]	応用系専門科目 (IoT・SE)				データ構造とアルゴリズム プログラミング演習III 情報工学実験I 情報工学実験II				プログラミング言語論 プログラミング演習IV 情報工学実験III 情報工学実験IV				並列分散処理 制御工学 コンピュータアーキテクチャII			

図2：2025年度入学者のカリキュラムマップ。実社会課題解決プロジェクトは、DS・IS共通科目となっている
<https://www.idsci.nagasaki-u.ac.jp/education/course-introduction>

り法人（地域 DMO）等からデータをもらう場合の 2 パターンがあります。まず課題を明確化するためにデータを分析し、次のプロセスではその課題に対してどのような手法があるのかを考える。1 年の終わりには、成果発表会で報告してもらいます。生きたデータを使うことで、学生も興味が湧くようです。」

松本 「私の担当は 1 年生の基礎的な確率・統計の授業ですので、演習がメインというよりも、座学で理論的なことを教えます。もちろん、R を使って平均値や区間推定、検定などを行います。教科書で言及されているデータを使うことが多いですね。」

ただ、最後の自由レポートでは、自分で探してきたデータを使って区間推定や検定してもらいます。中には PBL で扱うデータを使って試してみようという人もいますね。その他、変り種としては『あなたが将来どのようなデータを取って、どういう仮説を検定したいかを書きなさい』といった夢のある提案のような課題を出したこともあります。」

——教科書的なデータというと、サンプルデータを使って簡単な分析をするイメージでしょうか。

松本 「サンプルデータを使うこともありますが、1 年生はまだデータの読み込みもうまくできないので、手打ち入力でも何とかできる小規模なデータを使うほうが多いです。検定でいえば、確率分布に則って帰無仮説からデータをサンプリングし、それが実際に確率 0.05 で棄却されるといった、シミュレーションベースの使い方をしています。」

「手法の理解」に役立つデータと「大学だから」入手できるデータ

——公的統計においては、データの質保証、すなわちデータの正確性やニーズ適合性、適時性などが重視されます。皆さんはどのような要素を重視して講義で使うデータを選定されているのでしょうか。

植木 「応用系の医療・生命情報学では、手法の理解をねらいとしていますので、それに合ったデータを選ぶようにしています。例えば、臨床試験の標準的なデータなどです。また、死亡や疾患の発症など特定のイベントが起きるまでの時間とその要因を分析する『生存時間解析』では、『打ち切り（イベントが起こる前に追跡が終了する）』のあるデータを入れたりします。一方で、医療統計では時系列データはあまり扱いませんので、講義でも使っていません。」

——臨床試験のデータは、オープンデータを利用されているのですか？

植木 「そうです。ただ、日本のものはあまり見かけないので、海外のオープンデータを使っています。学生の興味を引くという点では日本のデータのほうがよいのですが。」

松本 「私も 1 年生向けのデータを選ぶときには『手法に合っているかどうか』を基準にしています。それから、学生が DS に興味を持つきっかけとなるように、『話題づくりに使えるデータ』という点も重視しています。例えば『年収は、平均値より下回る人のほうが、上回る人より多い』とか、

『平均値と最頻値は違う』といった印象的なデータが使いやすいですね。

一方ゼミでは、専門的なデータを使います。ゲノム関係のデータは、論文発表と同時に公開されますので、まずはそうした公開データを使って勉強します。それ以降は、医学部との共同研究なども多いので、未発表のデータでも許可を得て卒業論文に使わせてもらうこともあります。」

神山 「私の講座では、データ活用人材を育てることに主眼を置いているので、リアルタイムの社会事象を説明できるようなデータ、つまりニーズ適応性の高いデータを選んでいきます。学部広報を担当していることもあって、『こんな価値の高いデータを使えますよ』と学生や外部に向けてアピールできる、目玉となるデータを揃えたいと思っています。」

——先ほどのドコモの人流データも目玉の一つですね。他にもそういったデータはありますか？

神山 「大学は中立的な非営利組織でありますので、教育・研究のために、企業や自治体から非常に価値のあるデータを提供してもらえることがあります。学生に対してはもちろん、長崎県からの受託事業として開催している『社会人向け IT 先端技術応用講座』にも、そうしたデータを活用しています。」

——学生に対しては、データの選び方をどのように指導していますか？

瀬戸崎 「具体的なテーマに向かって分析を進めるために重要なのは、ターゲットを絞り込んだデータです。例

えば、『島原に観光客を増やしたい』
といっても、若者を呼び込みたいの
か、年配の人たちに来てほしいのか
によって対策が変わります。そこで、
課題を抽出する段階からターゲット
を絞り、『この層にはどんな課題があ
るか』と考えられるデータを選ぶよう
に指導しています。』

学生のモチベーションを いかにして保つかが課題

——PBLでは、学生と企業や自治
体といった連携先をどのようにマッ
チングしていますか？

瀬戸崎 「基本的には、企業や自治体
が出したテーマを学生が選びます。
1年生の科目Aは、予め5～6人ず
つのグループに振り分け、グループ
ごとに第1希望、第2希望を聞いて
調整しています。2～4年生の科目
B～Dでは、まず企業や自治体にプレ
ゼンテーションをしてもらい、その
テーマのもとに集まった学生がグ

ループを組みます。どうしても人数
に偏りが出てしまったときは、最終
的にはくじ引きで決めます。』

——希望どおりのテーマにならな
かった学生のモチベーションを保つ
工夫はありますか？

瀬戸崎 「テーマは20通り近くあり、
たいていは第5希望の範囲内で決ま
ります。ただ、第1希望ではないと、
どうしてもモチベーションが下がる
学生もいますから、ちょくちょく様子
を見て進捗を確認するといった対応
をしています。』

——学生への指導で工夫されている
ことがあれば、教えてください。

瀬戸崎 「現在、PBLは私を含め、教
員5人体制で担当しています。それ
ぞれ専門が異なり、私が教育工学を
専門としておりまして、その他の先
生は教育コミュニケーション、マー
ケティング、ディープラーニング

を専門にするなど、多彩な教員が関
わっています。このため、多様な角
度からアドバイスや指導をできてい
ると思います。』

神山 「私の研究室では、長崎市内を
走る路線バスにドライブレコーダー
を設置し、街中の映像データを収集
しています。自分たちでセンシング
したデータを使うことで、ノイズを取
り除くテクニックを学ぶことができる
のです。また、データの解釈や応用
について、学生にはできるだけ多く
知ってほしいので、企業などから外
部講師を招いて特別授業をしてもら
うこともあります。』

松本 「私は研究室に配属された学生
には、まずざっくりと興味を聞いて、
そこから話し合いながらピンポイン
トのテーマに絞り込んでいます。が
んに興味があるなら、使えそうなデー
タを示しつつ、最終的に例えば『人
によるがんになりやすさの違い』をテ
ーマにする、といった流れです。最初
から絞り込みすぎると視野が狭くな
りますから、データを触ったり、論
文を読んだりしていろいろ試してい
く感じです。』

神山 「DSとISに共通科目があるの
と同様に、研究室もどちらのコース
からでも選べるものがあります。私
や瀬戸崎先生の研究室もそうです。
私の研究室では、DSから来た学生に
プログラミングをガンガンやらせたり、
ISから来た学生に機械学習をど
んどん回させたりしています。就職
を考えれば、両方のスキルが必要に
なりますからね。』



自転車の利用率が低い長崎で、その利用促進を図るPBLの一例。若者の利用実態を調べ、自転車生活の効果を分析。SNSで動画コンテンツを配信するなどのキャンペーンを実施した。上は、長崎の街と自転車をイメージして生成したAI画像

https://www.idsci.nagasaki-u.ac.jp/bd/files/pamphlet_ja_2024.pdf
※上記パンフレットのP.8

——データを利用した教育に関する現状の課題はありますか？

瀬戸崎 「PBL では、1～2年生はまだ統計力が不十分で、うまく分析ができずに足踏みをする学生がいます。IS では最初にものづくりをするのでモチベーションが上がるものの、最後の分析や作ったプログラムの評価などになるとモチベーションが下がるグループもあります。DS のほうは反対に、分析手法が分かるまでモヤモヤしているけれど、それが分かってくる後半は、成果発表に向けてモチベーションが上がる傾向があります。両科目のさらなる連携が課題です。

もう一つは、グループワークなので、どうしても習得度にばらつきが出てしまうことです。統計学をしっかり学んだ学生はリーダー的な存在となって主体的に取り組むことができる半面、知識が不十分な学生がフリーライドになってしまうこともあります。一人が分析した結果を全員で理解するような工夫が必要だと思っています。」

松本 「微分積分や線形代数の演習などと違い、データ解析には明確な正解がありません。各自に好きなデータを選ばせると、当然それぞれ別の結果が出てきます。120人と受講者が多いため、それに対し個別対応ができないことに歯がゆさを感じます。」

植木 「最も大切なのは、学生のモチ

ベーションをどう上げ、保たせるかです。1年生の前半は、データ分析が何であるかも分かりません。『高校の授業でテンプレートどおりにやって簡単だったと軽視していたけれども、大学でやってみたら難しかった』と諦めてしまう学生もいるし、逆に、難しいから頑張る人もいます。『自分で探してきたデータをきちんと分析したい』と思うように持って行くことが重要だと思います。」

神山 「データサイエンスは今、注目されていますが、大学での学びが具体的にどんな仕事につながるのかが、学生には分からないのでしょうか。正直に言うと、大学側もうまく説明できていません。そこで、学部のウェブサイト『情報データ科学部から目指せる仕事』として、各界で活躍する人たちのインタビュー記事を掲載しています。仕事の内容紹介に加えて、そのために必要な学びについても語ってもらっています。」

クリティカル思考を身に付け 将来に向けて突き進む人に

——最後に、情報データ科学部で学ぶ学生たちの将来への期待をお聞かせください。

植木 「まずはDSやISを好きになってもらい、就職して社会に出てからは、大学で学んだことをしっかり使って活躍してほしいですね。」

神山 「企業はDSの即戦力を求めて

中途採用に力を入れているので、新卒の学生にとってはまだ狭き門です。当学部のようにDSとISの両方を学んだ学生が活躍することで、即戦力として認められれば、後輩の学生たちもキャリアパスを描けるようになるはず。そうしてくれることを期待しています。」

瀬戸崎 「学生を見ていると、将来やりたいことがない子が一定数はいるように思います。どんな自分になりたいか、どんな社会にしたいかをしっかり考えたうえでデータと付き合えば、なぜこのデータが必要なのか、分析にはどういう切り口がいいか、世の中で言われていることは本当に正しいのかといったことが、クリティカルに考えられるようになる。そういう力を身に付けて、自分の幸せに向かって前進できる人になってほしいと思います。」

松本 「DSやプログラミングは、手段であって目的ではありません。けれども、DS系の学部が乱立している今、学生たちは目的と手段を履き違え、DS自体を目的として入学しているような気がします。大学生活の中で、『将来これをやりたい』という本当の目的を見つけ、それに向かってモチベーション高く勉強してもらえれば、と願っています。」

——今日は、貴学部の画期的な取り組みについて詳しくお話しいただき、ありがとうございました。

調査票情報利用のためのオンサイト施設紹介

「オンサイト施設」は、情報セキュリティが確保された環境で、許可を受けた研究者がマイクロデータ（調査票情報）を用いて独自の集計・分析を行うための専用室です。第3回目の今回は、九州大学マス・フォア・インダストリ研究所様に2025年6月1日に新規に開設された「九州大学マス・フォア・インダストリ研究所オンサイト施設」をご紹介します。

〈第3回：九州大学マス・フォア・インダストリ研究所 (IMI)〉

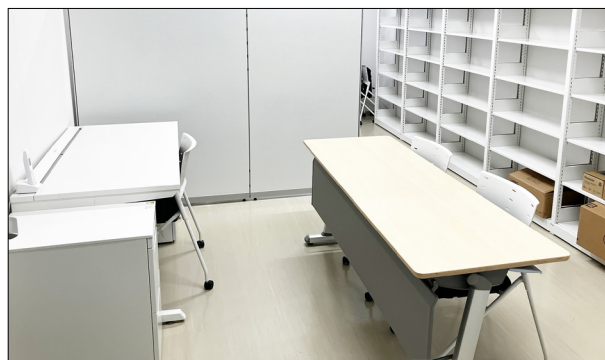
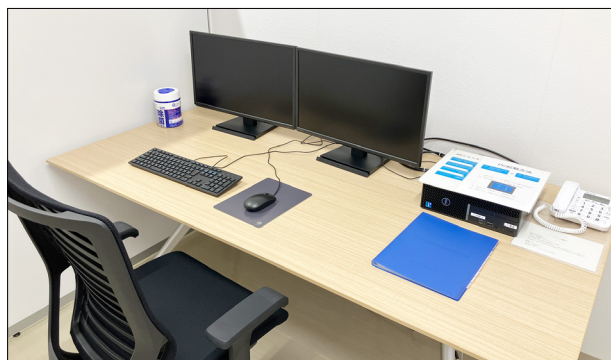
九州最大の都市であり、九州全域からのアクセスにも優れた福岡において、多様な数学を活用して社会に貢献することを目指すIMIにオンサイト施設を設置できないか——このようなご提案を、福岡県庁調査統計課および統計データ利活用センターの方々からいただいております。学内での設置場所の調整等に時間を要しましたが、「公益財団法人 統計情報研究開発センター（シンフォニカ）」の助成を受け、九州大学大学院経済学研究院をはじめとする関連機関・部署のご協力により、開設までの課題を乗り越えることができました。

設置検討の段階では、複数のオンサイト施設様のご厚意により見学やご相談の機会をいただきました。また、開設決定後には、統計データ利活用センターご担当者様から数多くのご助言を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

本施設は、伊都キャンパスイーストゾーンのイースト2号館（大学院経済学研究院）内に設置されています。施設内には、オンサイト利用専用のシンクライアントPCが1台設置されております。最大3名までのグループが利用可能です。加えて、2台の23.8インチワイドモニターを備えており、ミラーリング機能もご活用いただけます。

また、パーティションで区切られたスペースには作業用の机や椅子を配置しており、落ち着いた雰囲気の中でディスカッションや共同作業を行うことができます。施設のあるイースト棟は2018年にオープンした比較的新しいエリアで、カフェテリアや図書館なども併設され、研究者にとって快適で充実した環境が整っています。

今後も本施設は、九州地区におけるデータ利活用の中核拠点として、探索的かつ実証的な公的マイクロデータ解析の研究推進に貢献してまいります。



九州大学マス・フォア・インダストリ研究所のオンサイト施設

九州大学マス・フォア・インダストリ研究所 オンサイト施設

住 所 〒819-0395 福岡市西区元岡744 九州大学伊都キャンパス イーストゾーン

利用時間 9:30~16:30 (12:00~13:00は除く)

土曜日、日曜日、国民の祝日、夏季休日及び年末年始等の大学の休日を除く（上記の時間内であっても、都合により利用できない場合があります。利用可能日につきましては、上記ウェブサイトに掲載のカレンダーよりご確認ください）

ウェブサイト <https://www.imi.kyushu-u.ac.jp/onsite/>

九州大学マス・フォア・インダストリ研究所 オンサイト施設開設キックオフセミナー

九州大学マス・フォア・インダストリ研究所オンサイト施設の開設を記念し、2025年6月13日に「IMI オンサイト施設開設キックオフセミナー」が開催されました。当日はオンライン参加を含め、全国各地から117名の方々にご参加いただきました。特筆すべきは、研究者のみならず全国から多数の行政関係者にご参加いただいた点です。行政機関においても、EBPM（証拠に基づく政策立案）を意識した統計データの利活用への関心が一層高まっていることを強く実感する機会となりました。今後、オンサイト施設を拠点に、学术界と行政が連携したデータ利活用が一層進展していくことが期待されます。セミナー詳細は以下をご覧ください。

(<https://www.imi.kyushu-u.ac.jp/onsite/post-617/>)



IMI オンサイト施設開設キックオフセミナーの様子

活動報告

Report

1

統計関連学会連合大会企画セッション

本年度の統計関連学会連合大会が、9月7日(日)～11日(木)に関西大学千里山キャンパスで開催されました。当コンソーシアムでは、「公的統計における2次的利用の新展開とプライバシー保護研究の最新動向」をテーマに

した企画セッションを行いました。調査票情報のリモートアクセス制度開始やプライバシー保護研究のさらなる発展に向けて、多くの示唆と課題が共有されました。

プログラム

オーガナイザー 南 和宏（統計数理研究所）、伊藤 伸介（中央大学）、高部 勲（立正大学）、千田 浩司（群馬大学）

座 長 南 和宏（統計数理研究所）

1. 「公的統計における調査票情報提供の最新動向」
小松 聖（総務省統計局）
2. 「高機能暗号と連携するSDC技術の体系化に向けて」
南 和宏（統計数理研究所）
3. 「公的大規模データの統合的分析を指向したリンケージ技術の可能性」
伊藤 伸介（中央大学）、古隅 弘樹（兵庫県立大学）
4. 「大規模高次元データに対する差分プライバシーの適用に向けて」
寺田 雅之（京都橘大学・NTTドコモ）
5. 「組織間で互いにデータを秘匿したままSDCを適用するデータ分析の現状と課題」
千田 浩司（群馬大学）



統計関連学会連合大会の様子

ワークショップ「公的統計マイクロデータのチュートリアルと SSDSE を用いた R 言語による分析演習」

8月21日(木)、(独)統計センター(東京都新宿区若松町)にて、統計センター特別参与 兼 NTT インターネット常勤監査役の木村 敦氏らを講師に迎え、「公的統計マイクロデータのチュートリアルと SSDSE (教育用標準データセット) を用いた R 言語による分析演習」が開催されました。

本ワークショップは、統計分析の初心者を対象に R 言語を用いて SSDSE を使った基礎的なデータ分析を体験

し、公的統計マイクロデータの理解を深めることを目的として企画されたものです。

受講者からは「R 言語に初めて触れたが、基礎から丁寧に解説されていて理解しやすかった」「これまで SSDSE について知らなかったが、実際に体験したことで研究への応用を具体的にイメージでき、興味を持つ良いきっかけとなった」といった声が寄せられました。



木村氏によるワークショップの様子

活動予定

公的統計マイクロデータ研究コンソーシアムシンポジウム2025

当コンソーシアムでは、公的統計マイクロデータを学術研究に活用する大学・研究機関と、総務省統計局や統計センターなどの関係機関との連携のもと、年に1回シンポジウムを開催しており、本年度で第10回目を迎えます。

今年度の「設立10周年記念・公的統計マイクロデータ研究コンソーシアムシンポジウム2025」は11月18日(火) 10時30分～オンラインで開催いたします。

午前のチュートリアルセッションでは、公的統計利活用の最新の話題の他、公的統計マイクロデータの信頼性について、統計データの作成プロセスを通じて理解を深めることを目的とし、調査の企画から集計・製表・分析に至る一連の流れをご紹介します予定です。

また午後の第1セッションでは、本格運用が開始された調査票情報のリモートアクセス制度の紹介とともに、現行制度の課題を整理し、今後の改善に向けた議論を行います。続く第2セッションでは、公的統計マイクロデータに関連する最新の研究事例についての講演を予定しております。

プログラム・申込方法等の詳細については、近日中に公的統計マイクロデータ研究コンソーシアムの公式ウェブサイト (<https://jmodc.org>) にてご案内いたします。

プログラム (概要)

【チュートリアル セッション】

1. 「公的統計利活用の最新の話題」 羽鳥 記章 (総務省統計局 統計データ利活用センター長)
2. 「公的統計の代表的調査と統計編成工程の概要と家計調査を事例とする分類符号格付」
上田 聖 ((独) 統計センター 統計編成担当理事)

第1セッション：リモートアクセスをめぐる諸課題

1. 「我が国におけるリモートアクセスの現状」
小松 聖 (総務省統計局 総務課長)
2. 「海外における公的大規模データのリモートアクセスの現状」
伊藤 伸介 (中央大学経済学部 教授)
3. 「学術研究におけるリモートアクセス利用の留意点」
小林 良行 ((公財) 統計情報研究開発センター／中央大学研究開発機構)
山口 幸三 ((一財) 日本統計協会／中央大学研究開発機構)

第2セッション：公的統計の最新の研究事例

1. 「公的統計マイクロデータ及び行政記録の更なる利活用のための連合学習の応用」
高部 勲 (立正大学データサイエンス学部 教授)
2. 「マッチングキーを用いたデータリンケージの取り組み状況—国勢調査と社会生活基本調査を例に—」
伊藤 伸介 (中央大学経済学部 教授)
村田 磨理子 ((公財) 統計情報研究開発センター 主任研究員)
滝澤 有美 ((公財) 統計情報研究開発センター 主任研究員)
3. 「国勢調査と就業構造基本調査の世帯リンケージについて」
古隅 弘樹 (兵庫県立大学大学院情報科学研究科 准教授)

※講演者・講演内容は変更になることがあります。

公的統計マイクロデータ利活用に関する研究集会 (連携イベント)

公的統計マイクロデータ研究コンソーシアムシンポジウムの連携イベントとして、11月20日(木)に独立行政法人 統計センター主催の統計数理研究所公募型共同利用研究集会 (共同研究集会)「公的統計マイクロデータ利活用に関する研究集会」がオンラインで開催されます。 詳細は、(独) 統計センターのウェブサイト「イベント」ページにてお知らせいたします。

<https://www.nstac.go.jp/use/archives/event/>

第2回「公的統計マイクロデータのチュートリアルとSSDSEを用いたR言語による分析演習」

8月に実施した木村 敦氏らによる「公的統計マイクロデータのチュートリアルとSSDSEを用いたR言語による分析演習」ワークショップの第2回を2月に開催予定です。本ワークショップは、第1回と同様に統計分析の初心者等を主な対象としており、本コンソーシアムの会員およびその指導学生などを想定しています。詳細につきましては、コンソーシアム会員メーリングリストや公式ウェブサイトにてご案内いたします。

問合せ先

ADDRESS

〒190-8562 東京都立川市緑町10-3
大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構
データサイエンス共同利用基盤施設 社会データ構造化センター内
公的統計マイクロデータ研究コンソーシアム 事務局

MAIL office@jmodc.org

URL <https://jmodc.org/>